

幸田露伴の少年文学「鐵の物語」の英語典拠

吉田 大輔

はじめに

幸田露伴(一八六七—一九四七)を「東洋的」と呼び森鷗外(一八六二—一九三三)を「西洋的」と呼ぶ図式を指して、大粹での正しさを認めつつも、それはあくまで「入門的」な見方に過ぎないのではないかと疑義を呈したのは、晩年の露伴を直接に知る齋藤茂吉であった⁽¹⁾。露伴には「東洋的な色彩」が確かに濃い、そうした見方だけで露伴の教養は把握できるものではなく、より複雑な奥行きを持つものだとしたうえで、鷗外に比して見落とされがちだが露伴にも「西洋の香」は確実にある、と茂吉は述べていた。この点(露伴における「西洋の香」)は、今日まで多く検討されてきた問題と言いがたいが、たしかに露伴は、西洋の書物を典拠として使用することがあった。従来の露伴研究においてはまだ検討が不十分な西欧世界からの影響を考察する一端として、露伴の少年文学「鐵の物語」(一九〇九年ごろと推定)を取り上げ、英語文献からの借用を具体的に指摘した上で、その意義を考察することを本論の目的とする⁽²⁾。

一、露伴の英語、露伴の読書

露伴は若い頃、一八八一年七月(もしくは九月)から約一年間程度、東京英学校に通い、英語を学習した⁽³⁾。茂吉同様に晩年の露伴と直接の交流を持った柳田泉は、この時期の露伴について「例の努力主義で勉強したから、通學期間は短かかったわりに相當な語學力を得た」と述べている⁽⁴⁾。柳田は、露伴が「必要な参考書」「読みたいと思つた書物」は、英語なら「十分読めた」のだとも書く。英語文献によって「洋」の知識も得ようとした露伴の姿を述べ、「ミルトン」や「ニイチェ」のみならず、「雲のこと」を書いた著作、「山の紀行」から「支那」「印度」関係の文献、また「ある種の科学」の書物まで英語によって触れていたとし、和・漢に留まらず広範囲に及んだ露伴の読書を描写する⁽⁵⁾。露伴が、正規の学課としての英語学習を中途でやめているのは事実である。英語より得意な和・漢の教養をさらに磨いたほうがいい、と戦略的に考えてのこと

だったらしい⁽⁶⁾。しかし、露伴が西洋由来の教養にけして冷淡ではなく、しばしば英語でそれに触れようとしたことは、おそらく柳田が言う通りだろう。

露伴研究における非常に有益な記録を、柳田泉は残している。一九四四年、空襲で露伴の蔵書が焼けてしまうことを危惧した柳田は、これを記録しておきたいと考え、目録を作成する。露伴の死後、蔵書は古書市場に出され散逸した。よって、露伴蔵書の概要を知ろうとする際、現在、この目録は極めて重要な記録となっている。完全ではないと断りつつも、露伴の晩年の蔵書の大半を記録したものである。予想通りと言うべきか、その大部分を漢籍・日本古典が占めている。だが、その中には英語で書かれた文献や、西欧の著作からの翻訳本も散見する⁽⁷⁾。

柳田作成・露伴蔵書目録に見られる西洋由来の書物は、どのような姿で露伴の著述の中に現れているのだろうか。

二、露伴の少年文学「鐵の物語」の英語典拠

本論で注目したいのは、露伴蔵書目録に「*The Technical History of Commerce; or, The Progress of Useful Arts, John Years, 1887*」と記録されている英文著作である。*The Technical History of Commerce; or, The Progress of Useful Arts* は、タイトル(「商業技術発達史 有用諸業の進歩」)が示す通り、人類に有益なさまざまな道具や技術がどのように発展してきたかを事物ごとに項目を立ててまとめた著作であり、進歩史観によってそれを語る歴史書である。著者のジョン・イエーツに関しては、事典類で調べても未詳のままだが、W. B. Yearsの父とは同名異人のようだ。論者の参照している *The Technical History of Commerce; or, The Progress of Useful Arts* は、大阪大学付属図書館所蔵「三刷」一八八七年のもので、柳田が露伴の蔵書にあったと書き残している版とおなじものである。扉によれば、著者ジョン・イエーツは、法学博士(LL.D.)であることに加え、ロンドン地質学会、王立統計学会のフェローであり、二十年に渡って英国王立芸術協会の調査官の職にある人物だったらしい。

以下、この英語文献の記述からの転用を、露伴「鐵の物語」に確認していく。露伴「鐵の物語」は、一九一五年、露伴の少年文学を集めた『縮刷名著叢書 第五編 立志立功』(東亜堂書房)に収められ、その際の序文に「鐵物語は明治四十二年の筆」と露伴自らが書いているため、現在まで初出は確認されてい

ないが、一九〇九年の著述と考えられている⁽⁸⁾。これは、当時多く刊行された少年向け啓蒙書の露伴版であり、『立志立功』というタイトルによって編まれていることから啓蒙的な編集方針は理解される。「鐵の物語」をめぐっては、管見の限り、特にこれを取り上げた先行研究はない⁽⁹⁾。「鐵の物語」は、鉄という物質を人類はどのように利用し、人類の発展にそれがどのように役立ってきたかを少年向けに書いた歴史読み物である。『立志立功』の他の収録作品(『番茶會談』『供食會社』『人事豫測表』『芥子大黒』『小農園』『米價問答』)と対比的に露伴自らが扉で「鐵物語を除いては皆架空の言なりと雖も」と言及しているように「鐵の物語」は「物語」とタイトルにあるが、フィクションとして書かれたものではない。次のように書き出される。

鐵は言ふまでも無いことで有りますが、世界の必要物の一で有りまして、鐵と石炭とは地上の眞の主宰者であるといふ語があるくらいで有ります。凡そ此の位に吾人に取つて要用のものは殆んど無いので有ります。

今日の世界は、古代の世界に比して特に鐵時代の世紀と云はれて居るほどに鐵を用ゐている世ですから、各種の器械から工具から建築物から兵器から、何から何まで鐵を用ゐて居ますので、そして又堅固實質な鐵を用ゐて一才の工作の根柢を為して居るところから、前代の文明に超越した立派な文明を為して居るので有ります。實に鐵ほど吾人に利益を興へて居るものはありません⁽¹⁰⁾。

このように、鉄は人間にとって最も有用なもののひとつであり、その利用は「今日の世界の」「前代の文明に超越した立派な文明」の成立に深くかわるものとして、この読み物を書き出している。ついで露伴は、鉄は鉄分という「見えない姿」をとって、我々の血液や毛髪にも含まれ健康を維持するのに役立つっており、植物にも鉄が含まれている、と言う。染料や陶器に用いる釉薬にも鉄が含まれているとも述べた後で、しかし「鐵が鐵として働くところ」が「矢張り鐵の働の中での一番大きい所」だろうとして、鉄利用の拡大こそが現代の文明を飛躍させたのだ、とする。そして、「それなら、現代は何様して其様に鐵の働が十二分に擴張されたのでせう」と読み手に問いかけ、このような導入を経て、以降、日本・中国・西欧世界の鉄利用の歴史が述べられていく。

本論で問題にしたいのは、西洋の鉄利用史の典拠である。「鐵の物語」における西洋の鉄利用の歴史の記述は、『*The Technical History of Commerce or The Progress of Useful Arts*』と照らし合わせてみた結果、この英文著作に依拠して露伴が書いていると判明した。書き出しにおいて鉄ほど「吾人に利益を興へて居るものはありません」とある露伴の言葉も、イエーツの本にある記述とよく似ている。イエーツは、同書の冒頭において、石器時代 (THE STONE PERIOD)、青銅器時代 (THE BRONZE PERIOD)、鉄器時代 (THE IRON PERIOD) という歴史区分を示し、また、『旧約聖書』の中のトバルカイン (はじめて鍛冶を行ったとされる) などに言及しつつ、鉄の発見は、人類にとって、もつとも重要かつ影響の広範囲な発見だったとし、その影響は、衣・食・住すべてに及ぶと述べている⁽¹¹⁾。

露伴「鐵の物語」冒頭と、その典拠と考えられるイエーツの著作の書き出し双方においてひとつ留意すべきことは、「鐵時代」(THE IRON PERIOD) という言葉が、人類の技術的な発展という文脈において、きわめて肯定的な意味で用いられていることだ。イエーツの著作の冒頭で提示される時代区分のうち、特に青銅器時代 (THE BRONZE PERIOD) と鉄器時代 (THE IRON PERIOD) という言葉へ注目してみよう。イエーツが書く、石器時代↓青銅器時代↓鉄器時代、という時代区分自体は、おそらく今日においても有効である。だが、もともと、古代ギリシャの詩人・ヘシオドスに端を発する西欧の伝統の中では、「青銅の時代」「鉄の時代」という言葉は肯定的な意味を持っていなかった。ヘシオドス「仕事と日々」に見られる歴史区分は、黄金時代 (Golden Age) ↓銀の時代 (Silver Age) ↓青銅の時代 (Bronze Age) ↓英雄の時代 (Heroic Age) ↓鉄の時代 (Iron Age) という五つの区分であり、「英雄の時代」が挿入されることで、墮落に至る単純な歴史になってはいないものの、ここに登場する金属四種に限って言えば、黄金から銀・青銅を経て鉄に至る、という一連の流れは、人間の墮落の過程として言及される。すなわち、神々の如く暮らした「黄金の時代」から、神への畏敬を失っていく「銀の時代」、武器を手にし、互いを滅ぼし合う「青銅の時代」、(そしてこの後に「英雄の時代」が訪れ、やがて「青銅の時代」よりなお悲惨で、腕力が正義となり、人々が妬み心に取りつかれる「鉄の時代」が訪れる、という歴史の流れである⁽¹²⁾。

むろん、イエーツの著作に現れている言葉は、Age ではなく、Period だが、以上のことを踏まえると、「鐵時代の世紀」(執筆当時と推定される時期を考えれば二十世紀を

さす)の文明を「前代の文明に超越した立派な文明」であると書き出す露伴の態度は、イエーツの叙述と共振しながら、技術的進歩を素朴に肯定する十九世紀的な性格を有しているように見える。

「鐵の物語」の記述とイエーツ本の記述が一致している点は多い。すべて挙げることはいないが、以下に「鐵の物語」前半から二点、例示する。まず、露伴は、古代エジプトの鉄利用に言及する。

埃及の昔は随分開明で有りましたが、埃及人は鐵を知つては居たけれども、猶鐵は銅や青銅のやうには廣く用ゐられて居ませんでした。で、其の代りには、當時の人民は銅や青銅を鐵のように硬らしむる法を發見して居たと云ふ事です⁽¹³⁾

たとえば、この露伴の言及は、イエーツ著の、以下のような箇所に基づくものだろう。

Use of Iron by the Egyptians — Amongst the Egyptians, the use of iron was preceded by that of copper or of bronze, of which they made their kitchen utensils and mechanical tools. Iron was eventually used for these purposes, but, from the few examples of the kind existing, as compared with those of copper, it is evident that the latter maintained its place in preference to iron through the whole period of the history of ancient Egypt. Scarcely any iron was found in the country, and the extra cost of importation tended to limit its use. The skilful inhabitants had also discovered a method of rendering copper hard, and capable of bearing as fine an edge as steel, and the use of bronze tools in their sculptures has already been alluded to.⁽¹⁴⁾

(拙訳) エジプト人による鉄利用——エジプト人の間では、鉄に先んじて銅や青銅が用いられた。鍋釜類や工具類は銅・青銅を用いてつくられ、鉄もこれらの目的に使われたようだが、鉄製品はほとんど現存していない。銅と比較してみると、古代エジプトの歴史のすべての時期を通して、鉄よりも銅のほうがよく使われたのはあきらかである。鉄はほとんどエジプトで

發見されていない。輸入の費用が鉄の使用を制限させる傾向にあった。技あるエジプトの民は、銅を固くし、鋼鉄のような鋭利な刃先をつくる技術を發見していた。彼らが彫刻に用いた青銅器がそれをほのめかしている。

前半の細かい部分を省略しているが、古代エジプト人の鉄使用の例は皆無ではないものの広く用いられたとは言えないという大意はほぼそのままであり、その代わりに銅を固くする技術を持っていたのだ、とする後半部分も同じである。「と云ふ事です」と露伴は伝聞形で述べているため、なんらかの典拠の存在を感じさせるが、典拠が何なのかは露伴自身によって明言されていない。しかし、イエーツ著が典拠であったことはこうして並べてみればほぼ間違いない。ついで、古代ギリシャに露伴は言及する。

希臘の時になつて、漸く西洋では鐵が廣く用ゐられ出し、ホーマーの詩篇の中に、戦斧だの船大工の道具だの、犁鏱だの、牧羊鉤頭杖だの、戦車車軸だのが鐵で作られて居た事を證する記事が有るといふ事です。蓋し黒海近邊に居たチャベリス族の手より鐵や劍が供給されたらしいので、現存して居るチャリベートと云ふ語(鐵氣の義)などは即ち其の由来をば語つて居るのだといふ事である⁽¹⁵⁾

これもまた、イエーツの著作と対応している。イエーツの著作では、次のように書かれている。

4. Iron. — Iron first came into common use in Greece. Homer, in speaking of it, declares that with it were made poleaxes, shipwright's tools, ploughshares, sheep-hooks, and chariot axles. Our modern word 'chalybeate' is derived from Chalybes, a term used loosely to designate the tribes of the Black Sea, whose land was 'the mother of iron and of the sword'⁽¹⁶⁾

(拙訳) 鉄——鉄はギリシャにおいてはじめて広範に用いられるようになった。ホメロスは、戦斧、船大工の道具、鋤の先、先の曲がった牧羊杖、戦車車軸などが鉄でつくられていたことを述べている。現在のわれわれの言葉で 'chalybeate' (鉄分を含んだ) の意) という言葉があるが、これは黒海周辺

にすみ、その土地を「鉄と剣の母」たるところといわれた部族、カリユベス族からきたものである。

ここでは、ほぼ完全な「翻訳」を露伴はしている。ホメロスの言葉に確認できる鉄製品として露伴があげている「戦斧だの船大工の道具だの、犁鑿だの、牧羊鉤頭杖だの、戦車車軸だの」という羅列は、イエーツの著書に見られる記述とまったく一緒であり、その他もすべて符号するので「鐵の物語」を執筆する際、イエーツ著を露伴が座右においていたのは間違いないだろう。ホメロスを直接に参照したのではなく、イエーツの記述に従って、露伴は書いていたようだ。そのほかの転用もかなりの程度認められる。箇条書きでそのほかの対応箇所を示しておく。

- ・序盤「羅馬になつては愈々鐵の用が開けて」(露伴全集卷十、四四六)から「古はケルト種人民のレニシ地方に在りしもの間に行われたといふことである」(同四四七)の十一行が、Yeats, pp. 97-99の記述に対応(ほぼそのまま)
- ・中盤「元來鐵は」(同四四七)から「推し測り知れるといふことです」(同四四八)の間の十二行が、Yeats, pp. 99-100の記述に対応(一部省略あり)
- ・中盤「何処の國でも此様な風で」(同四五〇)から「文明を支へるに至つたのです」(同四五二)の間の三十行が、Yeats, pp. 323-326の記述に対応(一部省略あり)
- ・終盤「ベスマアの外に又一豪傑が現はれて、」(同四五三)から「恐ろしい大砲などもお茶の子に出来るやうになつた」(同四五四)の間の八行が、Yeats, pp. 462-464の記述に対応(一部省略あり)

結論すれば、この少年向け歴史読み物の半分以上を、露伴はイエーツ著に依って書いている。前述の通り、柳田泉が作成した露伴の蔵書目録は一九四四年に作成されたものだが、「鐵の物語」執筆にこうして利用していることを鑑みると、露伴が「鐵の物語」を書いた時期として自ら記す一九〇九年頃までには入手していた本なのだろう。つまり、一九〇九年から一九四四年まで、少なくとも積もって三十五年間、ずっと露伴が手許に置いていた本だと考えられる。前述のように「と云ふ事です」など、典拠の存在を感じさせる言葉も文中に頻出するので、隠す意図は特になかったのだろうが、イエーツ本を典拠としている

ことを本文中で言明しているわけではない。だが、このように照合して見ると、露伴はイエーツの文章を多少の省略はするがほとんどそのまま引く、という利用をしていた⁽¹⁷⁾。「鐵の物語」では、露伴が自ら調べて書いたとおぼしい日本・中国の鉄利用史よりも、はるかに多く西洋の鉄利用史に紙数が割かれる。「鐵の物語」は、ジョン・イエーツの著書を露伴が「翻訳」した部分が半分以上を占めていたとも言えるだろう。

三、大島貞益ただまさ訳『商業工藝史』、殖産との交差

このように、露伴「鐵の物語」の典拠として用いられているJohn Yeatsの*The Technical History of Commerce; or, The Progress of Useful Arts*だが、この本の別の版をもとにしたのではないかと思われる翻訳が、露伴に先行して、明治のはやい時期にすでに日本で出版されていたことにも触れておきたい。それは、おそらく官命によってなされた翻訳であり、その訳本は文部省編纂局から刊行された。明治の官僚として経済学関係の本を中心に多くの翻訳に従事した大島貞益(一八四一—一九一四)が訳している。大島訳は、『商業工藝史』と題され、一八八五(明治十八)年五月に「上冊」、六月に「下冊」が刊行された⁽¹⁸⁾。さきに述べてきたように、露伴の蔵書にあったと柳田泉が書き残すJohn Yeatsの*The Technical History of Commerce; or, The Progress of Useful Arts*は、三刷、一八八七年のものである。大島は、『商業工藝史』の原著をJohn Yeats, *The Technical History of Commerce, or skilled labour applied to production* という書であり、一八七一年にイギリスで出版されたものであるとしている。以下に以下の著作タイトルは異なっているものの、大島訳の『商業工藝史』と論者の手元にある一八八七年三刷のジョン・イエーツ著を照らしあわせると、その記述のほぼ全てが重複しているため、二刷か三刷の際にタイトルの一部を変更した同じ本ではないかと考えられる。では、先行する大島訳と露伴の「翻訳」はどのように違うのか。その点も例示し、簡単に述べる。「鐵の物語」に以下のような記述がある(「當時」は古代ギリシャをさす)。

當時の採鑛法は稚拙魯鈍で、單に器の中で手擣てづまにした後、土砂を流し去つて微分子の鑛分を留めるといふに過ぎなかつたと云います。で、武器甲冑に就ての記事は甚だ豊富で有つて、其の中タイオドルス及びブラツタルチしうくわまえめんは古の短劍の事を記して、「鐵は地中に埋められて鏽花満面なるに至らしめ

られ、而して後其の精英の存するもの鍛錬せられて、終に骨を裁りかた盆を劈きき鐵釘てつていを斬きつて利刃りじん損する無きもの成る」なぞと云つてあるといふことである⁽²¹⁾

これに対応する、イエーツ著の箇所は以下である。

The ancient mode of reducing the ore was rude and slow, the crude mineral being pounded by hand in a mortar, and the earthy particles afterwards washed away from the metallic granules. (.....) Diodorus and Putarch have thus described the ancient steel sword manufacture: "The iron is buried in the ground, and left till it is almost wholly rusted. What remains is forged, the sabres made from it being so beautifully tempered that they will cut through bones and helmets or sever a nail without spoiling the edge."⁽²⁰⁾

(拙訳) 古代の鉍石精錬法は、粗雑で手間がかかるものだった。天然鉍石をすりばちを用いて手で粉にし、そしてその微粒子を洗って、金属の粒をとるのだった。(……) デイオドロスとプルタルコスは、古代の鉄剣の製造を次のように描写する。「鉄を地中に埋め、まったく錆びてしまうまで放っておき、なお残っている鉄を鍛造する。そのようにしてできた剣は、骨を断ち、兜を割り、釘を断つてなお刃欠けがないほど美しい鍛えとなった」と。

デイオドロスを「ダイオドルス」、プルタルコスを「プラツタルチ」と露伴は書く。幸田文の回想に、女学校時代、ポーの「メルシュトレムに吞まれて」を英語テキストとして指定され訳読に苦しんでいた時、父の露伴が「うむ、あの話か」と言い英語を教えてくれた、というエピソードを語ったものがあるが、その中で文は「子供たちは父親の英語発音を尊敬してゐない。英国流でもなしアメリカ風でもない奇怪な発音であった」と書いている⁽²¹⁾。つまり露伴の英語の発音は我流だったという証言だが、「ダイオドルス」「プラツタルチ」という表記を見ると、こうした文の言が裏付けられる。逆に言えば、こうした表記は、たとえば弟の幸田成友など周囲の力を借りず、露伴が独力でイエーツ本を読んでいた証左になるようにも思われる⁽²²⁾。

さて、大島訳ではこの箇所はどうなっているのか。次のような訳文である。

上古鐵ヲ鎔スル法ハ、最モ迂拙ニシテ、初メ秤ヲ以テ粗鐵ヲ白中ニ搗碎シ、而シテ後、之ヲ淘シテ其ノ泥分ト鉄分トヲ分離セリ(……)ヂオドラス及ビプリユタルクガ、古代鋼鐵ヲ以テ劍ヲ造リシ法ヲ説ケルニ、鐵ヲ土中ニ埋メ、其幾下銹腐尽クルニ及ビテ、之ヲ出シテ鍛錬セリ、此鐵ヲ以テ作レル劍ハ、鐵兜硬骨ヲ井セ載ルベク、又鐵釘ヲ割断シテ刃ヲ傷ハズト云ヘリ⁽²⁴⁾

かたや明治十年代に先駆的に翻訳した大島、かたや明治四十年代に「翻訳」した露伴、という時代の差もあつたろう。また、公的な命に従つてこれを最初から終りまで完訳しなければならなかつた大島と、イエーツ著から自分がおもしろいと思う鉄の話だけを引用して少年向けの歴史読み物に用いることのできた露伴とは、そもそもこの英語文献への気安さが違うのは当然のことだ。しかしこのように並置すれば、大島訳はやはり生硬な印象を受ける。少年向けに鉄利用史を教えるという啓蒙的使命感も当然あつたのだろうが、大島訳と比べる、「読みつつある」「訳しつつある」露伴の躍動それ自体が「と云います。で、」「といふことである」というような言葉によつて刻印されているようであり、イエーツの産業発達史をおもしろがりつつ露伴は「翻訳」していることが文章から窺える。

文部省編纂局から刊行されたイエーツのこうした産業史の翻訳本は、これ一冊だけではないようだ。確認できる限り、都合三種の著作が、同じ一八八五年に出ている。それぞれの巻頭に於かれた記述に従つて時系列的に整理すれば、以下のようになる。

- ① 『商業博物誌』五月に「上」「下」ともに刊行、瓜生 寅訳
(原著) John Yeats, *National History of the Rare Materials of Commerce*
- ② 『商業工藝史』五月に「上冊」、六月に「下冊」、大島貞益訳
(原著) John Yeats, *The Technical History of Commerce, or, skilled labour applied to production*
- ③ 『商業沿革史』十一月に「上」「下」ともに刊行、河上謹一訳
(原著) John Yeats, *The Growth and Vicissitudes of Commerce*

同じ原著者による産業史関連の著作の翻訳が、一八八一年の半年余りの短期間に三冊、集中して出されている。殖産を急ぐ明治政府はこれらを有用な書物と考え、翻訳プロジェクトを実行させたのだろう。露伴が見ていたのはこのうち②の英語原著の別版と思われる。大島訳の存在を露伴が知っていたかどうかについては確定的なことは言えないものの、固有名を大島訳と比して我流な音で表記している点などから言って、露伴は大島訳を見ていなかったのではないかと論者は推測する。明治政府と露伴それぞれの産業発達史への強い関心は、一冊の英書をめぐって、大島・露伴の手になる二種類の「翻訳」を生んだということになる。むろん露伴が「翻訳」したのは鉄利用に関しての限定的な部分に留まるものの、露伴の産業発達史への興味は明治政府のそれと交差していたとも言えるだろう。では、露伴は、なぜ、こうしたものをおもしろがって読み、かつ自身の著述に利用したのだろうか。

四、露伴による「もの」の少年向け文明史の系譜

まず、さまざまな事物からなぜ「鉄」を特に主題として選び、その歴史を露伴は書こうとしたのかという基本的なことに関して、塩谷貫は、「鐵の物語」が書かれたとおぼしい一九〇九年の八年前、一九〇一年に八幡製鉄所が鉦炉を開いていたことに触れ、軽工業から重工業へ比重を移していこうとする日本の時代状況と呼応する著述だとごく手短に言う⁽²⁵⁾。それは確かにその通りだろう。ただ、塩谷に加えて言えば、鉄という物質や鍛冶仕事という労働は、それ以前から明確に露伴の好む主題のひとつであった。鉄をはじめとする金属を素材にした創造の瞬間を、露伴ほど何度も描いた近代日本の作家はおそらく珍しい。「一口劍」(一八九〇)「蹄鐵」(一八九三)「蘆の一ふし」(一八九三)「鷺鳥」(一九三九)など、いずれも作中において、鍛冶・鑄金が物語の細部を構成する要素としてではなく、中心的な役割を担って登場する。「蘆の一ふし」「鷺鳥」のモデルとなった鑄金家・岡崎雪聲(二八五四―一九二二)と露伴は直接の親交も持っていた⁽²⁶⁾。また、レトリックのレベルにおいても露伴は「鐵」という言葉を好んだ一面がある。たとえば、少年文学「鐵三鍛」の主人公の名前は「鐵造」であり、小説の冒頭には主題をパラフレーズするように「男の兒は赤裸百貫の生金 浮世の火に鍊られ槌に打たれ 礪石に磨かれて其後は 天晴の業物鉦光天を衝く 寶劍一口」という言葉が置かれ、少年の成長を、鍛えられるにつれ丈夫になり、

劍へと姿を変える鉄になぞらえている⁽²⁷⁾。こうした作家的資質が、史実に基づく啓蒙的読み物の形態をとって現われたのが「鐵の物語」なのだろう。

『少年園』『少國民』『実業少年』などの雑誌に依って、一八八九年から一九二二年にかけて露伴は、啓蒙的な少年文学を多く書いている⁽²⁸⁾。こうした露伴の少年文学には、発明譚の系譜に連なるものが複数ある。平川祐弘が言うように、露伴のそうした啓蒙的発明譚の意義は、まず福澤諭吉の文明論の発展的継承であり、またより直接には、サミュエル・スマイルズ、中村正直訳『西国立志篇』の発展的継承だろう。平川は、『西国立志篇』に深い影響を受けた文学者として特に露伴を挙げ、「葦の一ふし」などを立志篇的発明譚の系譜に連なるものとして論じている⁽²⁹⁾。

露伴の他の少年文学との関連で言えば、「鐵の物語」に最も近い性格を持つものとして、「鐵の物語」執筆時と推定される一九〇九年より約十年前に書かれた『文明の庫』(二八九八年一月から九月にかけて『少年世界』に連載)が挙げられる。これは、少年向けに「もの」の発達史を書こうとする力作であり、身の周りには語ありふれた茶碗や小刀を人々の創意工夫が結実した歴史的物として露伴は語る⁽³⁰⁾。そしてそれが文明というものだと言い、文明史を戦史にまさる「人の世の幸福」の歴史と呼び、陶器、紙、銃、仮名の発明と発展の歴史を事物ごとに論じてみせる⁽³¹⁾。

これまで述べてきたように「鐵の物語」が書かれたとされる一九〇九年時点で、露伴がジョン・イエーツの本を典拠としたことはほぼ確定的である。加えて、論者は調査をはじめた当初、「文明の庫」が発表された一八九八年時点においてもすでに露伴はこの本を読んでおり、「文明の庫」も同様にイエーツの著作の影響下に執筆されたものではないかと予想していた。露伴「文明の庫」とイエーツの *The Technical History of Commerce; or The Progress of Useful Arts* は、著作として志向するものが極めて似ているように思われたためである。露伴「文明の庫」、イエーツの *The Technical History of Commerce; or The Progress of Useful Arts* 双方ともに、「陶器」や「銃」といったように事物ごとにセクションを設け、「もの」の産業発達史を書こうとする試みであったと言える。むろん「文明の庫」で述べられる「仮名」の発達は「もの」の発達史という言い方からやや外れるものの、文字の発展に関する言及もイエーツの著作にはあり、そのような意味でも両者の立場は近いものに思われた。

だが、「文明の庫」において言及される産業発達史では、西欧世界に対する言及はほとんどない。唯一見られるのは「第三 銃器の巻」においてであるが、火炮がはじめて用いられたことを書く部分において、「英国王エドワード三世」が「クレシイの役」に用いたのが最初であると書いた箇所がごく部分的にイエーツ著の三三二頁などと符号するものの、他の記述はあまり符号しない。露伴は「文明の庫」執筆に際しては、これを書くための資料の入手に苦労したようで、たとえば一八九八年三月と推定される大橋乙羽宛て書簡において、越前の製紙史を書くための資料探しについて「良書を得ず」と述べている⁽³²⁾。もちろんこれは和文献の探索をめぐる言及だが、もしイエーツの著作を「文明の庫」執筆時に入手していたら、これを積極的に利用し、より西洋の事物発達史への言及を増やしたのではないかと推測される。おそらく、露伴は、「文明の庫」を書いた一八九八年時点では、志向にかなりの近似が見られると言えど、イエーツの著作を参照していなかったのだろう。むしろ、既に座右に置いていたかもしれないが、「文明の庫」において西洋の産業発達史への言及がほとんどないこと、「文明の庫」第三 銃器の巻」における西洋の銃砲史への部分的な言及がイエーツの本とあまり符号しないことを考えると、見ていなかったという判断のほうがより妥当に思われる。そのうち、一九〇九年ごろまでに露伴はイエーツの本を入手したのだろう。「文明の庫」を発表したあとに誰かに教えられ入手したのかもしれないし、自身の思想に近い本として自ら見出したのかもしれないが、その経緯はわからない。だが「良書を得」た一九〇九年ごろの露伴は自作「鐵の物語」の典拠として、一種の思想的共感を込めながら「引用」「翻訳」したものと推測できる。

おわりに

「鐵の物語」の終わり近く、闊達な文章で鉄利用史を語ってきた露伴は、なお現状に満足せず「美麗で、靱性があって、使ひよくつて、廉価なものが欲しいなどと慾張り切つた事を考え」ている者が今でもいる、と書く。また「四三酸化鐵で表面を被はせる」以外に「鏽に食われない鋼鐵」を開発する法はないかと考える者も今でもいるとも言う。「慾張り切つた」と書いていても「工夫は人々の好み次第で、智慧を使つて悪いといふ理はないから勝手に慾張るが宜い、此の先に何様な大發明が出来るかも知れない」と続くので、露伴はそれを

批判しているわけではない⁽³³⁾。鉄利用はおそらく隕石かなにかで落ちてきたものを使つてみたのが最初であろうかと述べたうえで（隕鉄、露伴は「鐵の物語」を「思へば思へば今日は進歩したものである。これから先にまだ何様な進歩する事だろうか。面白い面白い。実に面白い⁽³⁴⁾と結ぶ。「面白い」と三回も続けて書くほど鉄の発展の歴史を愉快に思い、進歩をやや素朴に歓迎するように語る露伴の一面がここには見られる。

本論で論じてきたように、イエーツの英文著作は、「鐵の物語」を書く際、露伴に典拠として利用された。それは、「翻訳」と言いうるほどイエーツの文章に忠実な利用だった。*The Technical History of Commerce; or, The Progress of Useful Arts*の著者、ジョン・イエーツは、自身とよく似た「もの」の連続性のなかに文明を捉えようとする歴史家として露伴に認識されたのかもしれない。『西国立志篇』的發明譚を發展的に継承し、それ以外の西洋文献も直接に利用して、「鉄」という「もの」を歴史の連続性の中で浮かびあがらせようとした文章として読むとき、「鐵の物語」は一定の意義を認められる小品と言ええる。そしてそれは、「文明の庫」の続編あるいは番外編と呼びうる性格を有していた。

注

- (1) 齋藤茂吉「露伴先生に関する私記」『齋藤茂吉全集』第三九卷、岩波書店、一九五五、九五—九六
- (2) 西欧世界の文物が露伴に与えた影響を考察する近年の成果として、岡田正子『幸田露伴と西洋 キリスト教の影響を視座として』関西学院大学出版会、二〇一二がある。同書は露伴が受けた西欧世界からの影響をキリスト教に絞って考察したもので、論者の関心とはややずれる。また、橋本順光「カーゴ・カルト幻想 飛行機崇拜の物語とその伝播」『天空のミステリー』青弓社、二〇一二は露伴の少年文学「風船旅行」などを西洋との関係から位置づけている。なお、露伴が典拠とした和・漢の文献を検討する作業は、近年で言えば須田千里、出口智之、中原理恵といった研究者を中心として着実な蓄積を見せている。
- (3) 柳田泉『幸田露伴』や塩谷賛『幸田露伴』は入学時期をともに「七月」としているが、渡辺賢治は当時の学則に触れて一八八一年「九月」であったかもしれないと述べている。渡辺賢治「露伴の東京英学校時代」『国文学踏

- (4) 查」二十四、大正大学国文学会、二〇一二、六一―七二
- (4) 柳田泉『幸田露伴』、眞善美社、一九四七、三二―三五
- (5) 柳田泉「露伴文学の世界」『柳田泉の文学遺産』第二卷、右文書院、二〇〇九、一七一―一七二
- (6) 前掲柳田、柳田泉の文学遺産二、一七一―一七三
- (7) 柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」『日本文学研究資料叢書 幸田露伴・樋口一葉』有精堂、一九八二、一〇二―一二二
- (8) 幸田露伴『縮刷名著叢書 第五編 立志立功』一九一五、東亜堂書房、扉。この本に収められた「鐵の物語」以外の六作品は全て石井研堂主筆の雑誌『実業少年』（博文館、一九〇八―一九二二）に一九一一年から一九一二年にかけて露伴が発表したものを再収録した編集なので、「鐵の物語」の初出も『実業少年』のいずれかの巻にあるのではないかと推測されるが、この点は調査できていない（あるいは露伴は「明治四十二年の筆」と書くのみなので、書くことは書いたが『縮刷名著叢書』に収められるまでどこにも発表していなかった著述かもしれない）。また、東亜堂『縮刷名著叢書』シリーズには、第三編として露伴『潮待ち草』（一九二二）、第三十五編として露伴『修習論』（一九一六）も収められている。『立志立功』とあわせれば合計三冊、露伴著作はこの叢書から刊行された（叢書のシリーズ番号と発行年がちぐはぐとなった理由は不明）。なお、石井研堂と雑誌『実業少年』をめぐる歴史を簡潔にまとめたものに、佐藤洋一「石井研堂と雑誌『実業少年』」『彷彿月刊』十五巻七号、弘隆社、一九九九、四―七がある。
- (9) 露伴の少年文学を扱った近年の研究のうち、一冊の著作としてまとめられたものに、関谷博『幸田露伴の非戦思想 人権・国家・文明——〈少年文学〉を中心に』平凡社、二〇一一があるが、その中でも特に取り上げられていない。また、初出年・初出誌が現在まで確認されていないためだろうか、同書の「露伴〈少年文学〉年次別一覧表」（四四―四五）では「鐵の物語」は省略されている。
- (10) 幸田露伴「鐵の物語」『露伴全集』第十卷、岩波書店、一九七八、四四三―四四四、傍線引用者
- (11) John Yeats, *The Technical History of Commerce or, The Progress of Useful Arts*, George Philip & Son, 1887, pp. 26-30
- (12) ヘシオドスは次のように書いている。「これに続く五番目の人々の間に、私にはもはや／おるべきではなかった。その前に死ぬか、後から生まれるべきだった。／何しろ今は鉄の種族の世なのだから。人々は／打ちひしがれて、昼も夜も辛苦と悲哀の／止む時はなく、神々は難儀な気苦労を与えるだろう」（ヘシオドス、中務哲郎訳「仕事と日々」『ヘシオドス全作品』京都大学学術出版会、二〇一三、一六八―）は改行を示すために付した。また、「鉄の時代」をめぐる主題は、近年で言えば、ジョン・マクスウェル・クッツェーの小説が巧みな変奏を見せている（ジョン・マクスウェル・クッツェー、くぼたのぞみ訳『池澤夏樹』個人編集 世界文学全集 一一― 鉄の時代』河出書房新社、二〇〇八）
- (13) 前掲露伴全集十、四四五、傍線引用者
- (14) Yeats, op. cit., pp. 51-52
- (15) 前掲露伴全集十、四四五、傍線引用者
- (16) Yeats, op. cit., p. 75
- (17) 本論で具体的に検討した露伴の英語文献利用のありようは、高島俊男が露伴「運命」をめぐる述べていた見解や、須田千里による一連の典拠研究成果なども符合する（高島俊男「しくじった皇帝たち」ちくま学芸文庫二〇〇八、一〇九―二〇六、須田千里「幸田露伴『骨董』の原話」『叙説』三十三、奈良女子大学、二〇〇六、二六―三〇、須田千里「幸田露伴『暴風裏花』の原話」『京都大学国文学論叢』三十一、京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室、二〇一四、十一―二十六など）。これらの論考は、露伴が典拠を利用する際、大きな改変を加えずそのまま利用する傾向があることを指摘している（高島はこの点を否定的に捉えている）。
- (18) 大島貞益の訳業の総論は、本庄栄次郎「大島貞益とその思想」『経済論叢』五十二巻四号、京都帝国大学経済学会、一九四一、三九九―四一六にまとめられており、また大島の工業論をめぐるのは、柴万三郎「大島貞益の工業論」『歴史研究』八、大阪府立大学、一九六三、一〇五―一一八がある。
- (19) 前掲露伴全集十、四四六、傍線引用者
- (20) Yeats, op. cit., pp. 75-76
- (21) 幸田文「あとみよそわか」『幸田文全集』第一卷、岩波書店、一九九四、一三―一三
- (22) なお、約十五年のちの一九二五年夏、高橋五郎訳『プルトーク英雄伝』を訳者から贈られた露伴は、熟読し、詳細な感想を残すとともに、依頼されてその序を書いているが、「この時は露伴も当然『プルトーク』と表記して

- (19) いる（露伴全集では第三十二巻に所収）。また、「露伴『鐵の物語』と直接の関係はないものの、鉄を地中に埋め、錆びるまで放っておき、その中になお残るものを精錬するというこのような逸話」は、ガストン・バシユラルもエドワード・チリーダの作品を語る文章の中で、十九世紀の『ロレ百科事典』からよく似た逸話を引用し言及している（ただしバシユラルが引用する文章では鉄を埋めるのは「土」ではなく「壁のなか」）。ガストン・バシユラル、渋沢孝輔訳「鉄の宇宙」『夢見る権利』ちくま学芸文庫、一九九八、八一
- (20) ジョン・イーツ、大島貞益訳『商業工藝史』上、文部省編纂局、一八八五、一六五―一六六、傍線引用者
- (21) 塩谷贊『幸田露伴』中、中公文庫、一九七七、二二七
- (22) これに関しては、須田千里「幸田露伴「鷲鳥」の虚実」『京都大学國文学論叢』三十四、二〇一五、一―二十五が詳しい。
- (23) 前掲露伴全集第十巻、二二九
- (24) 露伴の少年文学の全体像を俯瞰するには、前掲関谷幸田露伴の非戦思想、「第一章〈少年文学〉とは何か」のほか、福田清人「幸田露伴の少年文学」『明治文学全集九十五 明治少年文学集』筑摩書房、一九七〇、四三八―四四四、登尾豊「露伴と少年文学」『幸田露伴論考』日本図書センター、二〇〇六、二三九―二六〇などが有益。また、「少年文学」そのものの概観には木村小舟『明治少年文学史』全四巻、童話春秋、一九四九が示唆に富む。
- (25) 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志篇』』名古屋大学出版会、二〇〇六、一一一―一三八
- (26) 「文明の庫」に関しては前掲平川のほか、前掲関谷幸田露伴の非戦思想、一五一―一六〇、長田弘「幸福という一語」『詩人であること』岩波同時代ライブラリー、一九九七、三三三―三三七、小野二郎「物質に孕まれた夢 芸術・教育・労働」『小野二郎著作集三 ユートピアの構想』晶文社、一九八六、三七〇―三八一など。また、出口智之「幸田露伴と樋口一葉——『梶久物語』論」『幸田露伴の文学空間 近代小説を超えて』青簡舎、二〇一二、二四九―二七四は、「文明の庫」の陶器記述の和文典拠を部分的に指摘している。
- (27) (31) こうした意味では、石井研堂が一九〇二年から刊行をはじめ「少年工藝文庫」シリーズ（事物ごとに巻を立て、その発達を書いたシリーズもの）を先取りしている。
- (28) (32) 『露伴全集』第三十九巻、岩波書店、一九七九、六四
- (29) (33) 前掲露伴全集十、四四四―四五五
- (30) (34) 前掲露伴全集十、四五五、傍線引用者
- 附記 本論は、二〇一二年一月、日本比較文学会第四十七回関西支部大会において行った口頭発表に基づく。芳賀徹先生、橋本順光先生、西原大輔先生、鈴木禎宏先生をはじめ、口頭発表時にコメントを下された先生方に感謝するとともに、成稿に長らく手間取ったことをお詫びする。

The English Source of Koda Rohan's "Tetsu-no-Monogatari" ("The Story of Iron")

YOSHIDA Daisuke

Saito Mokichi (1882-1953) commented that "there is no disagreement in accepting Mori Ogai (1862-1922) as a "Western style" novelist and Koda Rohan (1867-1947) as an "Eastern style" novelist, but this contrast is too simple and appears to be for "beginners." In fact, Rohan studied English at Tokyo Ei gakko for one year from 1881, and he had ample ability to read English books. He would sometimes use English sources for his own works, but he would later become known as "Eastern style" novelist.

This paper aims to examine such overlooked aspects of Rohan, by focusing on his reading material about history, which was written for young students, entitled "Tetsu-no-Monogatari" ("The Story of Iron", 1909). In this work, Rohan wrote about how the human race discovered iron and expanded its usage. In more than half of the article, Rohan discussed about the history of its usage by the West. However, the source of Rohan's knowledge of Western history about iron usage has been unknown until now.

The results of this study show that more than half of this work is based on an English source, *The Technical History of Commerce; or, The Progress of Useful Arts* (John Yeats, 1887). By comparing both the writings, I found that Rohan had "cited" and "translated" the accounts from Yeats's writings.